



深イ〜話!

No.25

〜NTT西日本 第7回グランプリ受賞作品「10円玉のつまった巾着」より〜

携帯電話も留守番電話もまだない黒電話時代。

そんな時代に青春時代をすごした私の忘れられない思い出がある。

その日は朝から時雨の降る寒い寒い日で、私の志望校の入試日だった。一番苦手な科目が午前の一科目めにある。終わった後、「もう、あかん。」と思った。「残りの科目、どんなにがんばっても、一科目めの挽回は到底できへんやろう。」と思い、荷物をまとめて帰ろうとすら思った。

外の時雨は、いつしか牡丹雪に変わっていた。筆箱をカバンにしまいかけた私の目に弁当袋が留まった。弁当箱の上に通の封筒がのっていた。

「母さんの声が聞きたなったら、いつでも電話しいや。今日は一日、電話の前にすわってるさかい。カバンの底の巾着のお金、好きなだけ使いなさい。見た目通りの太っ腹な母より」

見れば、いつの間にか、カバンの底に小さな巾着が忍びこませてあった。持ち上げるとずしりと結構重い。ようこんなに10円玉集めたな。

ここにもメッセージの紙切れが入っていた。

「試験、おつかれさま。10円玉になって、ついてきちゃったよ。母より」私は、弁当箱のふたを閉めることも忘れて、公衆電話に走った。

呼び出し音が、一回鳴るか鳴らないかのうちに受話器をあげる音がし、母の「はい、もしもし。」といつもの優しい声が耳いっぱい聞こえた途端、もう止まらなかった。涙も、一科目めの失敗の話も…。

母はただ、「うん、うん」と私の話を聞いてくれた。

話し終わった後、もう帰ろうと思っていた気持ちが不思議なくらい、きれいさっぱり消えてなくなっていた。そして、気がつけば、母に「昼からの二科目め、がんばるわ!」と伝えていた。

その言葉のあと、ずっと電話の向こうで沈黙が続いていたので、聞こえなかったのかな、ともう一度声をかけようとしたちょうどその時、

「祈ってるから…。大丈夫。あんたは絶対大丈夫。なんてったって、私の娘やもん。」と力強い母の声が耳に届いた。

もう20年近くも前の出来事なのに昨日のここのように鮮明に思い出すのは、この出来事が、今でも、いろいろな困難に直面するたび、私を支えてくれるからに他ならない。